

研究会・シンポジウム報告

2023年10月3日（火） 定例研究会報告

テーマ： インドシナ難民として日本社会で生きる日々

報告者： チュン・テイ・トウイ・チャン氏（神奈川県外国人相談窓口 相談員）

その他： 社会知性開発研究センター・ソーシャルウェルビーイング研究センターとの共催

時間： 16:35～18:05

場所： 生田校舎社会知性開発研究センター3

参加者数：15名

報告内容概略：

チュン・テイ・トウイ・チャン氏は1984年にボートピープルとして日本に到着した。日本の中・高・専門学校を卒業後、教育機関・行政機関の外国人相談窓口や医療機関、法曹界などの相談・通訳を勤めている。その傍ら、神奈川県人権政策推進懇話会委員、国際理解教育講演会講師など、平和や人権の大切さを訴えつづけ、またベトナム文化の紹介活動、講演会活動などを行っている。

講演では、出国のための家族・親族との別離、貨物船に救助されるまで過酷な体験が語られた。さらには来日後も言語、習慣、社会制度、文化、価値観などの大きな壁が立ちただかっていた。具体的には、学校を休んで親に付き添い通訳しなければならない、母語の日本語と外国人の使う日本語のギャップ、勉学や進路の悩みを相談する人がいないなどである。しかしそうしたハンディキャップを乗り越え、高校、専門門学校へと進学することができた。しかし「国籍を持たない難民」としての苦しみはいつも付きまとっていた。

同じような困難に直面している人々を支援するために、日本語とベトナム語の能力を向上させ、専門用語を身に付け、現在ではさまざまな通訳業務に取り組んでいる。

記：専修大学人間科学部・嶋根克己

2023年10月30日（月） 定例研究会報告

テーマ： 地域産業と中小企業

報告者： 遠山浩教授、長尾謙吉教授、河藤佳彦教授

その他： 関満博名誉教授、忽那憲治教授

時間： 14時30分～17時30分

場所： 神田校舎7号館731教室

参加者数：対面31名、オンライン37名

報告内容概略：

まず基調講演で一橋大学名誉教授の関満博氏が地方の産業と振興政策の歴史的経緯について解説し、「現在はビジョン先行になっているが大切なのは人。行政の担当者には10年は仕事を継続し、地域や企業のことを理解した上で支援を行ってほしい」と言及した。

パネルディスカッションでは、遠山浩教授がコーディネータを務め、関氏、神戸大学大学院経営学研究科教授の忽那憲治氏、専修大学経済学部の長尾謙吉教授、河藤佳彦教授が意見を交わした。忽那氏は「地方創生のためのアントレプレナーシップ（起業家精神）教育」について実践をふまえて話し、長尾教授は「産業集積と地域産業政策」と題し経済地理学の観点から、地域のネットワークに加え集積地域間の連携の大切さについて解説した。さらに河藤教授は北海道室蘭地域の産業の新たな発展可能性について言及した。中核企業を中心としたピラミッド型のつながりだけでなく、系列、分野を超えて企業が交流していることが同地域の強みだと指摘した。最後に、コーディネータの遠山教授が、それぞれの事例発表を踏まえ、それぞれの地域にあった地域産業政策が必要と締めくくった。

記：専修大学経済学部・中村吉明

2023年11月7日（火） 定例研究会報告

テーマ： サステナブル・ファイナンスの拡大に向けた EU の金融制度改革と最近の動向
について～EU タクソノミーと天然ガスと原子力をめぐる対立～

報告者： 石田周（愛知大学地域政策学部准教授）

時間： 昼 12：30-13：40（1:40 p.m.）

場所： 生田校舎 9 号館 M969 会議室

参加者数：8名

報告内容概略：

持続可能性や環境を重視する EU において「グリーンな経済活動の分類」に相当する EU タクソノミーが議論された。その中で何故天然ガスや原子力がグリーンとされたか、を中心に報告が行われた。締約から財政支出の規模が限られる EU 諸国では市場からの資金調達の関係で EU として推奨すべき「グリーン」の定義に何をを入れるかは非常に重要となる。実はウクライナ侵攻の前から方向性は出ている。

EU 内でも各国政府及び関連企業・NGO 等の間で天然ガスや原子力を入れるべきか否かに関して非常に激しい議論があった。当初欧州議会では共通の基準ではガス発電で出る CO2 を地中固定する CCS を入れても一般的に提示した基準を満たさないことや核廃棄物は持続不可能との見解もあり、(技術専門家グループ TEG や水力発電盛んなオーストリア等の意向も受けて) 石炭に加え天然ガス・原子力をグリーンから排除する修正を果たす予定であった。しかしガス産業・原子力産業のロビー活動等もあって、移行活動の枠内で天然ガスや原子力はグリーンに含まれることとなった。天然ガスは当初の条件を緩和したがそれでも CCS は必須な条件になり、原子力も推進・反対双方から不満の残る形になった結果、条件を満たしたガス発電は 3 社、原子力発電はフランスの EDF を含め大手 5 社に留まり、有力な企業が有利になった可能性は残る。

記：専修大学経済学部・OGAWA, Takeshi

2023年11月21日（火） 定例研究会報告

テーマ： ①「香港の魅力と将来性」
②「世界を支える 大成長市場の中の日本」

報告者： ① 徳久 日出一（ワールド・ビジネス・アソシエイツ）
② 野下 勝彦（日本貿易振興機構（JETRO））

時間： 2023年11月21日（火） 12時30分～15時30分

場所： Zoomでのオンライン開催

参加者数：10人

報告内容概略：

徳久日出一様は、長年にわたって経営コンサルタントとして活躍しており、香港の経済状況、日本企業の海外進出に関して深い見識を持っている。野下勝彦様は、専修大学商学部卒のOBで、現在日本貿易振興機構の輸出専門家として日本企業の海外展開支援に従事している。報告者のお二人は、香港の社会経済、生活環境、中国との違い、香港と日本間の活発な交流関係などについて最新の情報を報告した。香港は日本にとって中国に次ぐ第2位の農林水産物、食品の輸出地であり、輸出の約16%が香港向けであり、輸出額が年々拡大している。また、ドンキホーテ、ニトリ、マツモトキヨシ、全日空などの大手企業は輸入制度が整備され、自由貿易港でシンプルな税制度を採用する香港を選択し、近年快進撃を続けて、事業を拡大している。報告者は、香港、マカオ、広州、仏山、肇慶、深圳、東莞、惠州、珠海、中山、江門（広東省の9都市）、合計11都市を包括する「粤港澳大湾区」についても報告した。中国政府は2015年から国家戦略として「大湾区計画」の構想を発表した。香港、マカオ、珠海を結ぶ、全長55kmで世界最長の「港珠澳大橋」は2018年に開通された。大湾区は世界で最も港湾と空港が集中する地域であり、その経済力、高いレベルの国際化とイノベーション要素が凝縮していることから、今後は世界一流のベイエリア、中国で最も開放的で経済活動が活発な地域になることが期待されている。

記：専修大学経済学部・傅凱儀

2023年11月29日（水） 定例研究会報告

テーマ： 関東大震災時の朝鮮人虐殺

報告者： 田中正敬（文学部教授）

時間： 18:00～19:30

場所： 専修大学社会科学研究所会議室（生田キャンパス）

参加者数： 7名（うちオンライン2名）

報告内容概略：

佐藤よりグループ研究「災害対応と社会状況・構造の関係についての総合的研究」の主旨や狙いを説明した後、田中教授より関東大震災朝鮮人虐殺の研究の特徴、流言と虐殺の様相、「混乱の中で」では説明できない実態、朝鮮人虐殺についての研究課題について報告いただいた。報告の中では、日本史学者で関東大震災時の朝鮮人虐殺に詳しい山田昭次氏の指摘（公文書をたどると、政府当局が朝鮮人の暴行に関する情報を集めて虐殺を正当化しようとしていたことがうかがえ、事件の記録の欠如や事実がゆがめられることにつながったのではないかという指摘）をご紹介いただいたり、民間人による回想や日記などの記録を利用することで、各地域の虐殺についてより詳しく知り得る余地があることなどが語られたりした。報告後、朝鮮側でのメディア報道、国内でのメディア報道、事件の背景要因（1919年の3・1独立運動等）、事件の地理的分布等について質疑応答やディスカッションが行われた。

記：専修大学ネットワーク情報学部・佐藤慶一

2023年12月5日（火） 定例研究会報告

テーマ： 菅江真澄と十和田古道

報告者： 川上隆志（文学部教授）

その他： 鈴木健郎（コメンテーター、国際コミュニケーション学部教授）

時間： 16:30～18:30

場所： 神田782

参加者数：6名

報告内容概略：

近年、日本における古道ブームは賑わいを見せている。ヘリテージツーリズムは特に人気である。マスツーリズムからミニマムツーリズムへの流れの中で、自然・歴史・文化など具体的なテーマを旅に求めるようになった。そうした古道ブームを背景に、よみがえりつつある十和田古道について、菅江真澄の「遊覧記」との関連から報告した。

まず、よみがえる十和田古道の最新発掘状況実情を報告し、古道の復元の課題を確認した。また霊山十和田と十和田信仰の関係を、中世以来の南祖坊伝説との関係や近世の南部藩の庇護による賑わいの様相を捉え直す。そして菅江真澄が訪れたときの叙述を取り上げ、十和田古道のかつての姿と現在の姿を重ね合わせ、その意義を考察した。

その上で観光資源の可能性を実体的に考えることの重要性を指摘し、地域特性や地域連携の課題、市場競争力の可能性を議論した。

記：専修大学文学部・川上隆志